

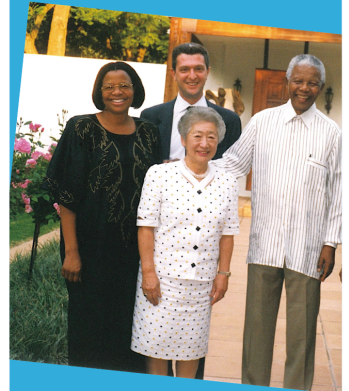
緒方貞子さんと  
聖心の教育展

# 展示 緒方貞子さんと 聖心の教育



2021年  
**5月13日** (木)  
2023年  
**4月27日** (木)

(入場無料)



**緒方貞子さん** 1927年9月16日、東京生まれ。聖心女子大学卒。カリフォルニア大学パークレー校にて政治学博士号取得。91年より2000年まで第8代国連難民高等弁務官として難民支援を指揮。01年より人間の安全保障委員会共同議長、アフガニスタン支援総理特別代表などを歴任。03年より12年まで独立行政法人国際協力機構(JICA)理事長。享年92歳。

## “マザーブリットから受けた教訓は限りない”

(『マザー・ブリット追悼録』緒方さんの寄稿文より)

本展示では、緒方貞子さんの数々の貢献と生き方について、そして学生時代を過ごした聖心の教育と初代学長マザーブリット時代を紹介いたします。本展示を通じて、緒方貞子さんが力強く示した、現代社会における地球規模の課題への関わり方が、より多くの人に深く理解され、一人ひとりの行動の変容につながっていくことを期待したいと思います。

主催：聖心女子大学

グローバル共生研究所

Sacred Heart Institute for Sustainable Futures [SHISF]

協力：日本聖心同窓会 (JASH)

助成：一般社団法人 東京倶楽部

開催場所：

**BE\*hive**  
展示 + ワークショップスペース

開館日・時間 月～土：10時～17時

臨時休館情報は研究所ウェブサイトでご確認ください

住所：〒150-8938 東京都渋谷区広尾4-2-24

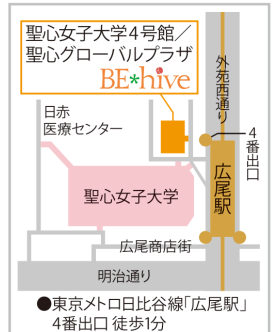
聖心女子大学4号館/聖心グローバルプラザ

電話番号：03-3407-5811(大学代表)

メール：jimu-kyosei@u-sacred-heart.ac.jp

ウェブサイト：https://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp/

展示の紹介動画を研究所ウェブサイトでご覧ください。



---

## ごあいさつ

緒方貞子さんが2019年10月22日に逝去され、本学第一期生であった緒方貞子さんを偲ぶ追悼展示を同年12月半ばより開きました。もっと詳しい展示を見たいという多くの声を受け、このたびあらためて「緒方貞子さんと聖心の教育」をテーマに展示を開催いたします。

緒方さんが聖心女子大学の学生時代に大きな影響を受けたと語る初代学長マザーブリットの教育ビジョンは、人間を大切にし、社会の変革に関わることのできる賢明な女性を育成することにあります。マザーは戦後間もない困難な時代に、驚くべき経営能力をもって大学の開学および発展のために尽くすと同時に、常に学生一人ひとりへの細やかな配慮と指導を欠かしませんでした。一方、緒方さんは、難民支援や国際協力の場で、常に現場に向向いて人々の声を聴くことを重視し、人間の尊厳と命を守ることを最優先にした、時には英断とも言われる支援を強靱なリーダーシップをもって実行しました。

緒方さんが描いた人間の共存、連帯、平和構築、そのための“人間の安全保障”の概念と実践は、聖心の教育の源にも在るものです。“緒方さんの信念”と“聖心の教育”の間に響き合うものがあるとすればそれは何か、展示を御覧になられた皆様と共に探し考え、新たな気づきや次の時代に繋がる実践のきっかけになれば幸いです。

聖心女子大学グローバル共生研究所

隣の人は自分とは違うのです。

違った部分は、**より**理解するとか、

**より**尊敬するとかしなくては。

(小山靖史『緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で』NHK出版、2014年)



# INPUT

## *Be Independent*

### マザーブリットの教え、生きかた



マザーブリットは聖心女子大学創立から19年間、学長を務め、その教えは多くの卒業生に記憶されています。

1期生の緒方さんも「これからの女性がどうあるべきか、自分でものを考え、人々のために行動する女性の育成という明確なビジョンをお持ちで、私も大きな影響を受けました。」と述べています。一人ひとりへの行き届いた配慮と高い経営能力はマザーブリットの二大特徴でした。

## *Be Cooperative*

### 聖心で学んだ社会奉仕の基本



緒方さんの奉仕活動の基本は、大学時代に培われました。マザーブリットの方針は「社会への奉仕は学生全員が行うもの」でした。例えば、年1回授業返上で、三河島セツルメント（養護施設）の子どもたちをキャンパスに招き、ゲームやスポーツを一緒に楽しむ企画を学生たちが立て、ランチやお土産も用意しました。夏休みの臨海学校にも付き添い、3度の食事当番を担当しました。

## *Be Intelligent*

### 自ら社会と関わる人に



マザーブリットは学生の将来について「家庭だけでなく、社会で役立つ人になること」を力説しました。在学中も社会活動のための資金集めを奨励し、将来、社会を改善するためにリーダーシップを発揮する賢明な女性となるよう指導しました。

また、学長の仕事が多忙でも1年生の「宗教」と4年生の「現代思想」の必修授業を担当し、自ら執筆した教科書を使用しました。



## マザーブリットが行動をもって示した教えとは



「マザー・ブリットはアイデア豊富で、実行力や交渉力があり、素晴らしいリーダーでした。彼女に頼まれると誰も嫌とは言えないのです。」

(『聞き書 緒方貞子回顧録』岩波書店) と緒方さんは述べています。

聖心女子大学の黎明期、校舎建築の資金を獲得するために、マザーブリットは工夫を凝らした数々の募金活動を考案し、学生にもそうした活動に関わることを求めました。支援者から調達した外車が当たるラッフル(福引)券も、学生たちが銀座の街角で販売しました。その際、マザーブリットは「試験などと重なって忙しくても、同時にいくつもの仕事をこなせるように」と学生たちを激励しました。この言葉には、忙しくても要領よく行動なさいという、学生の将来を想う気持ちがあふれています。



## “超我の奉仕” “Service above Self”



「“超我の奉仕”というロータリークラブのモットーに深い感銘を受け、以来、これが私の生涯の指針となってきました。」

(“2016-17年ロータリー学友世界奉仕賞”受賞の際のスピーチより)

緒方さんは、マザーブリットの「世界をよく見なさい」という教えを受けて、1951年聖心女子大学卒業後、ロータリー国際親善奨学生としてアメリカのジョージタウン大学大学院に留学しました。ロータリークラブの会合にもよく参加して、“超我の奉仕”という言葉に出会い、その崇高な精神に心打たれ、奉仕の場が大学から世界へと広がり、人生の方向付けとなったと語っています。



## 現場で意見を聞き 協力・協働し合う



当時の学生生活には、学年対抗コンテストやバザーなど、学生が協働で目的を達成するプロジェクトが多く組み込まれていました。

マザーブリットは「仲間と相談し、協力、協働すること」の大切さを繰り返し述べ、他人任せではなく、自ら進んで現場に出て行動するように指導しました。

学生自治会のメンバーには、特にリーダーシップについて念入りに指導し「一人で何でもやってしまうようなリーダーには大きな仕事はできない。皆の意見をよく聴いて、相談し、判断して、協働で実践すること。」を強調しました。緒方さんも、マザーブリットの指導は、後に大いに役立ったと述べています。

# OUTPUT

## 人間の安全保障



冷戦終結後の1990年代、「国」という単位で考えていては有効に対処できない問題が増加しました。1991年の湾岸戦争の際にイラク国内で生じたクルド人避難民問題もそのひとつです。

当時、国連難民高等弁務官だった緒方さんは、この問題に対して、人間の命を守るという原則に立って解決を図りました。こうした考え方と行動は、国際協力のあり方を変えていきました。

## 難民の将来まで見据えたトータルな支援



「生きていれば、次の可能性が生まれる」。難民支援に当たって、緒方さんは尊厳ある人間の命を守ることを最優先にしました。さらに「難民支援は、難民が祖国に戻ったところで終わるのではありません」とし、紛争終結後、故郷に帰還した人々が安定した生活を取り戻し、当事者間で和解と共生を実現し、平和が構築されるまで、途切れることなく支援する目標を描きました。

## 共生・連帯・平和の構築



世界は多様な文化や価値観、社会から成り立っていますが、みな同じ「人間」であり、相互に依存し合って生活しています。自分のことだけでなく、世界の人々のことも考えなければならないのです。

緒方さんは、国連難民高等弁務官などとして、紛争や難民など、世界で起きているさまざまな問題の解決に努めました。





## 一人ひとりの生命や尊厳を守る



条約上では国外にいる人々を「難民」として保護することになっており、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の活動もそれに沿って行われていました。しかし、緒方さんは「人間の命や尊厳を守る」という考えのもと、クルド人避難民をイラク国内で保護する決断をしました。

その後も、こうした考えに基づいた緒方さんの前例にとらわれない活動は、国際社会に大きな影響を与えていき、人間一人ひとりに着目し、人々を脅威から守る「人間の安全保障」という考え方の源流のひとつになったのです。



## 教育を重視し女性の自立を支援する



難民が国の再建を果たすには、切れ目のない支援が必須であると主張した緒方さんは、特に若者の将来のために小学校以降の教育の機会が必須と考え、2001年に難民教育基金\*を創設しました。

最も複雑で困難を極めたルワンダ難民の救済では、1994年の大虐殺の後、人口の7割近くが教育をほとんど受けていない女性という状況でした。新生ルワンダを建設するには和解と共生の実現とともに、女性の能力向上のための教育こそが鍵となると緒方さんは考え、1997年、女性のイニシアティブ支援を推進しました。

政府の援助に加えて多くの女性支援団体との協力により立ちあがったルワンダの女性たちは目覚ましい成果をあげ、現在ルワンダの女性議員数は56%と世界トップ(2021年)になっています。

\*英語名 "Refugee Education Trust" 略して RET。聖心女子大学の難民支援学生団体シュレット SHRET (Sacred Heart Refugee Education Trust) は緒方さんが設立した RET の精神に基づいて活動しています。



## 相互に依存し合って生活「持ちつ持たれつ」



私たちは国際社会のなかで相互に依存し合いながら暮らしています。緒方さんはそれを「持ちつ持たれつ」という言葉で表現しています。

緒方さんは、国連難民高等弁務官、日本のアフガニスタン支援総理特別代表、JICA 理事長などとして、さまざまな政府や機関、組織、個人と協力し、紛争や難民、貧困などの問題に取り組みました。

しかし、対立する人々の間で和解を進め、共生をつくりだすことは容易ではありません。緒方さんは、紛争終結後に異民族で構成される住民と一緒に働く機会などを提供することで、共生の実現を試み、成果を上げました。

展示

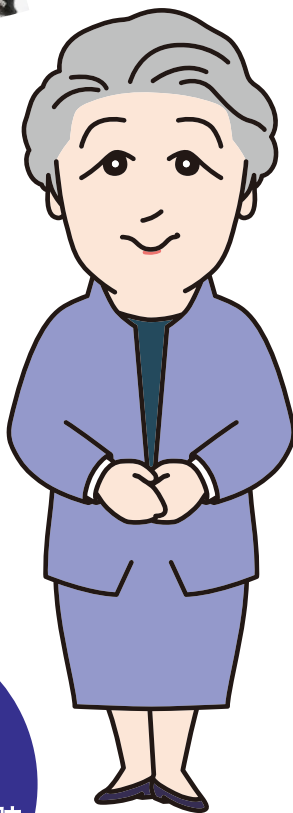
# 緒方貞子さんと 聖心の教育

## “マザーブリットから受けた教訓は限りない”

(『マザー・ブリット追悼録』緒方さんの寄稿文より)



2022年  
**5月12日** (木)  
▼  
2023年  
**4月27日** (木)  
(入場無料)



新展示

第1期での展示に加え、第2期では緒方さんの想いを受け継いで尽力する人々の動画や新たに見つかったマザーブリットの写真などを紹介します。



ルワンダからの声  
Voices from Rwanda



マザーブリットの軌跡

Tracing  
the Memories of  
Mother Britt

**緒方貞子さん** 1927年9月16日、東京生まれ。聖心女子大学卒。カリフォルニア大学バークレー校にて政治学博士号取得。91年より2000年まで第8代国連難民高等弁務官として難民支援を指揮。01年より人間の安全保障委員会共同議長、アフガニスタン支援総理特別代表などを歴任。03年より12年まで独立行政法人国際協力機構(JICA)理事長。享年92歳。

主催：

聖心女子大学  
グローバル共生研究所  
Sacred Heart Institute for Sustainable Futures (SHISF)

協力：日本聖心同窓会 (JASH) 助成：一般社団法人 東京倶楽部

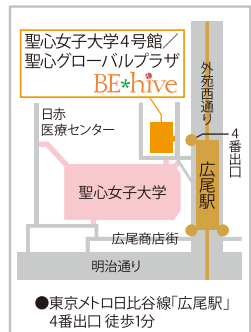
開催場所：**BE\*hive**  
展示 + ワークショップスペース

開催日・時間 月～土：10時～17時

臨時休館情報は研究所ウェブサイトでご確認ください

住所：〒150-8938 東京都渋谷区広尾4-2-24  
聖心女子大学4号館/聖心グローバルプラザ  
電話番号：03-3407-5811 (大学代表)  
メール：jimu-kyosei@u-sacred-heart.ac.jp  
ウェブサイト：https://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp/

展示の紹介動画を研究所ウェブサイトでご覧いただけます。



## 緒方貞子氏年表

※青文字は「世界・日本の動き」です

|       |       |     |   |
|-------|-------|-----|---|
| 1926年 | 12月   |     | 大正天皇逝去、昭和天皇が皇位を継承。元号が「大正」から「昭和」に変わる                             |
| 1927年 | 9月16日 | 誕生  | 東京市麻布区（現在の港区麻布）にて外交官の中村豊一・恒子夫妻の長女として生まれる（名付け親は母方の曾祖父・犬養毅）       |
| 1929年 | 10月   | 2歳  | アメリカ・ニューヨーク株式市場で大暴落が起こり、世界恐慌が始まる                                |
| 1930年 | 8月    |     | 父の赴任に伴い、秩父丸でアメリカ・サンフランシスコへ引越す                                   |
| 1931年 | 9月    | 4歳  | 満州事変が始まる  |
| 1932年 | 5月15日 |     | 曾祖父・犬養毅が五・一五事件で逝去   |
|       | 10月   | 5歳  | 父の赴任に伴い、オレゴン州ポートランドへ引越す<br>ポートランドのケイトリン・ゲーベル学校に入学               |
| 1935年 |       | 8歳  | 父の赴任に伴い中国・福州へ引越す  |
| 1936年 | 9月    | 9歳  | 父の赴任に伴い中国・広東へ引越す  |
| 1937年 | 7月    |     | 日中戦争が始まる  |
|       |       |     | 一時帰国し、 <b>聖心女子学院4年生に入学</b>                                      |
|       | 12月   | 10歳 | <b>聖心女子学院を休学し、父の赴任に伴い香港へ引越す</b>                                 |
| 1938年 |       |     | 帰国し <b>聖心女子学院5年生に復学</b>   |
| 1939年 | 1月    | 11歳 | 父が香港から帰国し外務省内に住む  |
| 1940年 | 4月    | 12歳 | <b>聖心女子学院高等女学校に進学</b>   |
| 1941年 | 12月   | 14歳 | 真珠湾攻撃。太平洋戦争が始まる   |
| 1944年 | 4月    | 16歳 | <b>勤労働員で大崎の明治ゴム化成に通う</b>  |
| 1945年 | 3月10日 | 17歳 | 東京大空襲に遭う<br><b>(聖心女子学院でも本館、専門学校校舎が焼失)</b>                       |
|       | 3月27日 |     | <b>聖心女子学院高等女学校を第31回生として卒業</b>                                   |
|       | 4月    |     | 軽井沢に家族で疎開<br><b>(聖心のシスターのところへ通い英語・仏語を学ぶ。</b><br>三笠ホテルの外務省分室で働く) |
|       | 8月15日 |     | 終戦を軽井沢で迎える  |
|       | 12月   | 18歳 | 軽井沢から東京に戻り、裁縫などの稽古事をする  |
| 1946年 |       |     | <b>聖心女子学院専門学校入学</b>   |
|       | 11月   | 19歳 | 日本国憲法公布（1947年5月施行）  |
| 1948年 | 4月26日 | 20歳 | <b>聖心女子大学開学</b><br><b>聖心女子大学入学</b>                              |

## 1930年頃／幼少期



中央に座るのが緒方さんの曾祖父で総理大臣も務めた犬養毅。「貞子」の命名は曾祖父によるものでした。（最前列の女の子が緒方さん）

|               |             |  |
|---------------|-------------|--|
| 1948年<br>～51年 | 20歳<br>～23歳 | <p>聖心女子大学学生自治会会長（'49、'50）<br/>MSSS（全学生参加の社会奉仕団体）、<br/>国際関係クラブ（初代部長）、テニス部を創部し、<br/>全日本選手権に出場<br/>（女子ダブルス準決勝進出、ミックスダブルス<br/>決勝進出、シングルスベスト16）</p> |
| 1951年 3月15日   | 23歳         | <p>聖心女子大学卒業<br/>卒業生代表として謝辞を英語で述べる</p>  |
| 3月            |             | <p>聖心女子大学同窓会発足、<br/>初代会長に就任（～1954年）</p>  |
| 5月            |             | <p>『虹』創刊号に寄稿（英文にて4記事）<br/>ロータリークラブの奨学金を得てアメリカ・<br/>ワシントンDCのジョージタウン大学大学院に留学<br/>（修士課程国際関係論）氷川丸で渡米</p>   |
| 9月            |             | <p>サンフランシスコ平和条約調印</p>  |
| 1953年         | 26歳         | <p>『聖心女子大学同窓会報』創刊（1969年に『宮代』と<br/>改題）英文レター寄稿<br/>ジョージタウン大学で修士号を取得（国際関係修士）、<br/>帰国<br/>東京大学の特別研究生になり岡義武教授のゼミで<br/>近代日本政治外交史を学ぶ（3年間）</p>         |
| 1955年 12月     | 28歳         | <p>『聖心女子大学論叢』<br/>第7集に論文「ポーツマス会議期における<br/>日本外交に対する世論」が掲載される</p>  |
| 1956年         |             | <p>アメリカ・カリフォルニア大学バークレー校に留学<br/>博士課程で政治原論と国際関係論を学ぶ</p>  |
| 10月           | 29歳         | <p>日ソ共同宣言調印</p>  |
| 12月           |             | <p>日本、国際連合に加盟</p>  |
| 1958年         | 31歳         | <p>父の病気のため帰国</p>   |
| 1960年         | 33歳         | <p>緒方四十郎氏と結婚</p>   |
| 1962年         | 35歳         | <p>長男誕生<br/>夫の転勤に伴い、イギリス・ロンドンへ引越す<br/>（渡英中にアメリカに寄り、カリフォルニア大学にて<br/>博士号の口頭試問を受ける）</p>   |

1948年頃／学生自治会



大学開設と同時に学生自治会が発足。役員は選挙で選ばれ、毎週全員参加で英語による会議を開催。

1950年～／三河島セツルメント



毎年、三河島の児童施設の子どもたちを招待し、学生が準備したゲームや昼食を楽しむ日がありました。

1951年／聖心女子大学卒業



第1回卒業生。卒業式で泣いた学生は一人、緒方さんでした。（緒方さんは前列右から2番目）

1951年／大学年鑑



大学年鑑のプロフィールには、学生自治会長、奉仕部、テニス部、英語演劇部などが記されています。

1951年／氷川丸にて



米国留学のため横浜から氷川丸に乗船してサンフランシスコへ向かう緒方さん。（緒方さんは左から2番目）

1951年～／米国留学時代



ワシントンのジョージタウン大学留学時代。大学院修士課程では外交史や国際関係論を学びました。

|              |     |   |
|--------------|-----|---|
| 1964年        | 37歳 | カリフォルニア大学バークレー校で政治学博士号を取得<br><i>Defiance in Manchuria: The Making of Japanese Foreign Policy, 1931-1932</i> (University of California Press)を刊行<br>日本語訳(補正を含む)『満州事変と政策の形成過程』(原書房)を刊行(1996年)<br>『満州事変—政策の形成過程』と改題し、岩波書店(岩波現代文庫)より刊行(2011年) |
| 1965年        | 38歳 | 国際基督教大学非常勤講師に就任   |
| 1967年        | 40歳 | 長女誕生  |
| 1968年 9月~11月 | 41歳 | 日本政府代表団の一員として国連総会に出席  |
| 1969年 12月    | 42歳 | 『マザー・ブリット追悼録』に寄稿<br>(タイトル「マザーブリットの死に想う」)  |
| 1970年 10月    | 43歳 | イタリア・ローマで開催された聖心会総会にオブザーバーとして出席<br>日本政府代表団の一員として国連総会に出席(2回目)  |
| 1971年 5月     |     | 「聖心キャンパス」6号に寄稿<br>(タイトル「社会的格差の是正に努力—聖心会総会に出席して」)  |
| 1972年        | 45歳 | 日中共同声明により日中国交正常化  |
| 1974年        | 47歳 | 国際基督教大学准教授に就任<br>(~1979年。1976~1979年の間は国連公使に就任したため休職)  |
| 1975年        | 48歳 | 日本政府代表団の一員として国連総会に出席(3回目)<br>家族は夫のニューヨーク転勤に伴い転居   |
| 1976年 2月     |     | 国連公使に就任   |
| 1978年        | 51歳 | 国連特命全権公使、ユニセフ執行理事会議長、<br>国連人権委員会日本政府代表に就任   |
| 1979年 11月    | 52歳 | 外務省の依頼でカンボジア難民救済実情視察団長としてタイへ赴く<br>聖心女子大学General Lectureで講演「国連と明日の世界」  |
| 1980年        | 53歳 | 上智大学外国語学部教授に就任(~1991年)  |
| 1983年        | 56歳 | 聖心女子大学General Lectureで講演「日本の対外政策と日本人の対外観」   |
| 1986年 3月18日  | 58歳 | 第8回AMASC世界大会が東京で開催<br>(テーマ“International Communication”)基調講演に登壇   |

## 1965年~/ICU教員時代



非常勤講師、のち准教授\*として、教育・研究、子育て、国連での活動など多くの仕事をこなしました。  
\*当時のICUでは准教授にあたる職位 写真提供:ICUアーカイブズ

## 1968年/国連総会出発時



日本政府代表団の一員として国連総会出席のため、NYに向かう緒方さんを送り出すご両親と子どもたち。

|           |     |   |
|-----------|-----|---|
| 1988年     | 61歳 | <i>Normalization with China: A Comparative Study of U.S. and Japanese Processes</i> (Institute of East Asian Studies, University of California, Berkeley) を刊行、1992年に添谷芳秀訳で『戦後日中・米中関係』（東京大学出版会）として刊行 |
| 1989年 1月  |     | 昭和天皇逝去、明仁皇太子（現・上皇）が即位、元号が「昭和」から「平成」に変わる。この年の前後からソ連・東欧の社会主義体制が動揺・崩壊し、2月にソ連軍がアフガニスタンから撤退、6月に中国で天安門事件が発生、11月にドイツで「ベルリンの壁」が崩壊、12月にマルタ島の米ソ首脳会談で冷戦の終結が宣告される<br>上智大学外国語学部長に就任                              |
| 1990年 8月  | 62歳 | イラクがクウェートに侵攻（湾岸戦争のはじまり）   |
| 1991年 1月  | 63歳 | 米軍を中心とする多国籍軍がイラクへの攻撃を開始   |
| 2月        |     | 国連難民高等弁務官に就任  |
| 4月        |     | イラク・クルド難民問題のため現地を視察、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の活動としては前例のない国内避難民の保護を決断する  |
| 6月        |     | ユーゴスラビアで内戦がはじまる   |
| 1992年 7月  | 64歳 | 救援物資の空輸が始まったサラエヴォを視察する  |
| 11月       | 65歳 | 国連安保理で旧ユーゴにおける人道問題について報告を行う   |
| 1993年 2月  |     | 度重なる救援活動への妨害に対し、サラエヴォへの援助物資輸送の一時停止を決断、状況を改善に導く  |
| 1994年 4月  | 66歳 | ルワンダ大統領搭乗機が撃墜された事件をきっかけに、ルワンダ国内で民族対立にもとづく大量殺戮がはじまり、大量の難民が発生する   |
| 1996年     | 68歳 | ユネスコ平和賞受賞   |
| 1997年 1月  |     | ルワンダの再建のため、ルワンダ“女性イニシアティブ”を開始   |
| 2月        |     | アフリカ大湖地域の難民問題に関して同地域の6ヵ国を訪問する   |
| 7月        |     | マグサイサイ賞受賞   |
| 1998年 2月  | 70歳 | アフリカ大湖地域の難民問題の解決を目的とした国際会議開催のため、東アフリカ諸国を訪問、調整にあたる   |
| 5月        |     | ウガンダの首都カンパラで周辺諸国の代表を招き、難民問題に関する会議を開催する  |
| 2000年 12月 | 73歳 | 国連難民高等弁務官を退任  |

1991年／国連難民高等弁務官就任



第8代国連難民高等弁務官に就任。人道主義に徹した難民保護に尽力しました。  
©UNHCR/E.Brissaud

1995年／難民キャンプ訪問



コンゴ民主共和国の難民キャンプにて。隣国ルワンダから逃れてきた難民に迎えられる緒方さん。  
©UNHCR/Panos Moutmsiz  
1995年2月

2000年／国連難民高等弁務官時代



中央はネルソン・マンデラ氏。左から2番目は現国連難民高等弁務官のフィリップ・グランディ氏。

|       |        |     |   |
|-------|--------|-----|---|
| 2001年 | 1月     |     | 森喜朗内閣総理大臣の南アフリカ、ケニア、ナイジェリアへの訪問（日本の現職総理として初めてサハラ以南アフリカ諸国を訪問）に同行する人間の安全保障委員会の共同議長となる  |
|       | 9月     |     | アメリカで同時多発テロが起こる。<br>滞在先のニューヨークで<br>世界貿易センタービルの倒壊を目撃   |
|       | 10月    | 74歳 | アメリカ軍などがアフガニスタン・タリバーン政権への攻撃を開始する  |
|       | 11月    |     | 文化功労者となる<br>日本政府からアフガニスタン支援総理特別代表に任命される   |
| 2002年 | 1月     |     | パキスタン、アフガニスタン、イランを訪問する。<br>東京で開催されたアフガニスタン復興支援国際会議の共同議長を務める   |
| 2003年 | 3月     | 75歳 | イラク戦争始まる  |
|       | 10月    | 76歳 | 国際協力機構（JICA）理事長に就任  |
|       | 11月    |     | 文化勲章受賞  |
| 2005年 |        | 78歳 | <i>The Turbulent Decade: Confronting the Refugee Crises of the 1990s</i> (W.W. Norton & Company, Inc.) を刊行、2006年、日本語版として『紛争と難民 緒方貞子の回想』（集英社）を刊行 |
| 2011年 | 3月     | 83歳 | 東日本大震災発生  |
| 2012年 | 3月     | 84歳 | JICA 理事長を退任   |
| 2015年 |        | 88歳 | 『満州事変——政策の形成過程』が中国語訳される<br>野林健・納家政嗣編『聞き書 緒方貞子回顧録』（岩波書店）を刊行  |
| 2019年 | 5月     | 91歳 | 明仁天皇（現・上皇）の生前退位により<br>徳仁皇太子が即位、元号が「平成」から「令和」に変わる  |
|       | 10月22日 | 92歳 | 2019年10月22日、逝去  |

## 2001年／聖心会創立200周年記念講演会

会創立200周年記念講演  
講師 緒方貞子氏

「連帯感のある世界をどうやってつくったらいいか、私共に与えられた一番大きな課題です」と述べました。

## 2003年～2012年／JICA時代



初代 JICA 理事長として約 8 年間「現場主義」を重視し「人間の安全保障」の実践に力を注ぎました。（右はアフガニスタンのカルザイ元大統領）

## 2007年／JICA 理事長再任



「日本が試される年になる。リーダーシップを発揮しなければ」と意欲を見せました。（UNHCR の同僚と 80 歳のバースデイを祝う）

いろんな状況の変化のなかで、

できることを

一生懸命

努力してきただけです。

(小山靖史『緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で』NHK出版、2014年)



## 国連難民高等弁務官としての責任感・指導力

紛争地での難民保護には危険や困難が伴いました。緒方さんは、さまざまな思いを抱きつつ、リーダーとしての強い責任感をもって決断し、スタッフとともに任務を遂行しました。



©UNHCR/J.Crisp

### リーダーとしての責任感

●「決めなくてはならないのは私だから。(中略)だって、聞く人はいないのです。(中略)トップというのはそのためにいるのです」

(小山靖史『緒方貞子戦争が終わらないこの世界で』NHK出版、2014年、p.179)

●「大事なときは行動しないとならないのです。スピードが求められるときに、原則に即してどう決定するかを慎重に考えている余裕はありません。そのような中でこそ、リーダーシップが大事なのです」

(野林健・納家政嗣編『聞き書 緒方貞子回顧録』〈岩波現代文庫〉、2020年、p.151)

●(超人的な働きぶりについて)「一種の使命感のようなものもありましたが、やはりいい部下がたくさんいたから、やることができたのです。みんな結束していましたし、一緒に仕事をしていて楽しかったです。もちろん大変なこともたくさんありましたけれど、スタッフと話をしていくうちに、やってやろうという気になってくるのです」

(同前 p.234)

### 現場主義

●「現場を見るということは、人間と知り合うということでしょう。(中略)そこで生きている人たちに会うのは、とても大事なことだと思います。その場まで行って、きちんと犠牲者と会い、そして状況を判断できないとね」

(前掲『緒方貞子戦争が終わらないこの世界で』p.190)

### リーダーとしての責任感

●(旧ユーゴスラヴィア紛争における活動の際)「輸送隊が次々と攻撃されます。犠牲者が続出して、耐えがたい思いをしました」

(前掲『聞き書 緒方貞子回顧録』p.167)

●「人道援助を政治的に利用するなんて、考えられないことです。それを聞いて、私は激怒したのです」

(同前 p.168)

●「少数派が戻ってきて自分の家をようやく修復した直後に、家が爆破されるという出来事もありました。どうしてそんな愚かなことを……、いま思い出しても、腹が立ってしょうがありませんよ」

(同前 p.179)

●(辛かったこと)「部下を亡くしたことです。部下といますか、私の同志でした……(長らく沈黙)」

(同前 p.235)

### 折れない心

●「私はもともと楽観主義的な性格なのかもしれないです。へこたれるということを経験したことがないのです」(同前 p.234)

●「私は、心配で眠れないということはないのです。気分転換にテニスを時々していました」

(同前 p.235)



©UNHCR/Sylvana Foa

## 緒方さんの体力と勘を養ったテニス

小学生でテニスを始め、聖心女子大学時代にはテニス部を創設してテニス三昧。

国際社会で重責を負ってもテニスは続け、数々の難局と向かう時には、テニスと共通の技法が働いたと振り返ります。



得意なショットはベースラインからのバックハンド

●私は元々おてんばでした。子供のころいちばん楽しみだったのは運動会。長距離は苦手だけど短距離は得意中の得意。身体を動かすことが大好きだったんです。そんな私の一番近くにあったのがテニス。テニスってボールをうまく打てると天にも上るような心地になるでしょ。スパンと打てたときは本当に気持ちいい。テニスは私の性に合っていたのね」

(『東京都テニス協会 60 周年記念誌 庭球 ALWAYS』)

●「学生時代、夏の軽井沢は全日本選手権の練習の場という感じでした」と言っておられ、大学3年の時(1950年)の全日本選手権シングルス・ベスト8という成績でした。

(『東京都テニス協会 60 周年記念誌 庭球 ALWAYS』)

● UNHCR のトップとして、難民保護と支援に従事し、現場主義のもと世界各地を東奔西走するようになってからも、ジュネーブの本部に戻ると、少なくとも週一回は昼休みや週末にテニスを続けられました。強行軍の難民キャンプ視察から夜行便で戻ってすぐ着替えてテニスコートに向かわれることもあったと言います。「テニスで鍛えた体力やカンが私の現在の健康の基礎となり、難局に立ち向かうときの活力の源泉となっていることは否定できない。」

(『聖心女子大学テニス部 50 年誌』)

●国際舞台でさまざまな仕事(を)するようになって気づいたのはテニスで培った「戦略性」が役にたつということ。テニスって空間を見つけることがとても大事でしょう。右が空いていればそこへ、後ろがあいていればドロップショット。ネットに詰められたらロビング。そうやって相手(交渉側)の手を読むことが、得意のようでした。勘が働くともいうのかしら。これはテニスをやっていたからじゃないかしら、、、それに世界を飛び回る上でなくてはならないのが体力。若い時にテニスで鍛えておいて本当に良かったと思います」

(『東京都テニス協会 60 周年記念誌 庭球 ALWAYS』)

●緒方さんは、晩年も軽井沢の別荘で過ごされるときに現役学生のテニス部軽井沢合宿と時期が重なると、必ずコートに来て後輩を激励してくださいました。



聖心女子大学テニス部 軽井沢合宿にて

## 他者への思いやり、深い学識にもとづく 思考と行動、家族の支え

緒方さんが、困難な課題に取り組み、さまざまな人々と協力して成果をあげられた背景には、他者への思いやりや高い学識がありました。そして、家族のサポートも不可欠でした。



国連総会出発時に緒方さんを見送るご家族

### 家族のサポート

- (子育て中の緒方さんが、国連総会に初めて参加することになった際に、父・中村豊一氏が緒方さんに向けた言葉)「みんなでやれば何とかなるから、行きなさい」

(小山靖史『緒方貞子戦争が終わらないこの世界で』NHK出版、2014年、p.128)

- (夫・緒方四十郎氏について)「私が日本を離れているいろいろな仕事を続けてこられたのも、緒方のサポートがあったからです。向こうがどう思っているかわかりませんが(笑)、パートナーとして感謝してもしきれないと思っています」

(野林健・納家政嗣編『聞き書 緒方貞子回顧録』(岩波現代文庫)、2020年、p.62)

### 深い思いやり

- (UNHCRの職員)「彼女をいちばん的確に形容する言葉は、やはり“ケアリング(思いやりの深い)”という言葉でしょう。難民に対してはもちろんでしたが、もう一点言っておきたい側面は、彼女がUNHCRのスタッフのことも非常によく気にかけてくれていたことです」

(前掲『緒方貞子戦争が終わらないこの世界で』p.185)

### 他者の声に耳を傾ける

- (大学時代の友人)「みんなの意見をそれぞれお聞きになって、まとめ上げていました」「何しる人の意見をよくお聞きになりますから」

(同前 p.80)

- (UNHCRの職員)「彼女はチームプレーヤーで、人の意見を求め、よく話を聞こうとするタイプの人なのです」(同前 p.176)

- 「緒方さんは、難民たちがどんな経験をしてここに至ったのかを理解するために、ひたすら彼らの声に耳を傾けていたのです。その姿は思いやりにあふれていました。さらに、難民の話をも十分に聞いた上で、その地域の政治的なリーダーとも交渉しました」(同前 p.188)

### 優れた実務家であり研究者

- 「何か片づけたいと思うのです。プラグマティックな性格なのかもしれません。それに、ディシジョン・メイキング(政策決定過程論)を勉強してきた影響もあるかもしれない」

(前掲『聞き書 緒方貞子回顧録』p.234)

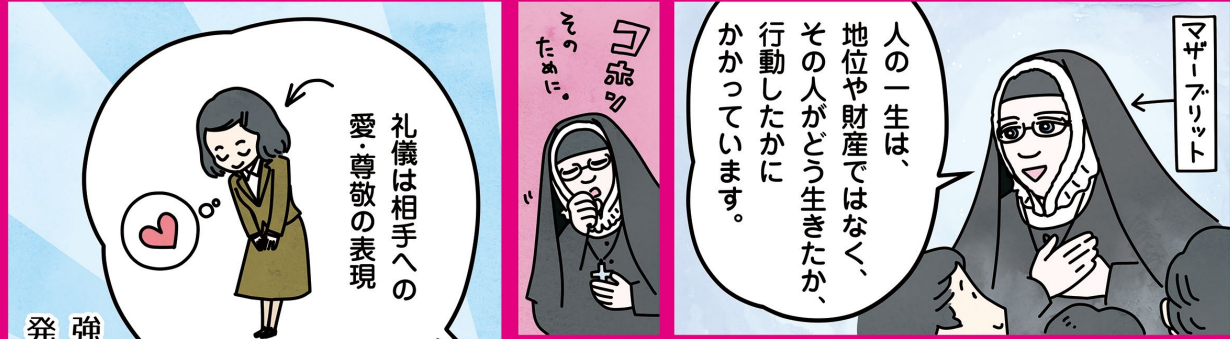
- 「私には研究が実務に非常に役立ったのです。たとえば、政策決定過程論がそうです。実務をするようになって、物事を動かそうとするときに、政策決定過程論の思考方法が本当に役立ちました」(同前 pp.91-92)



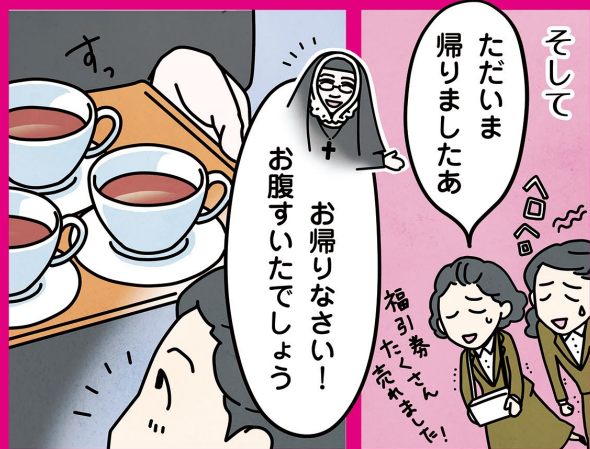
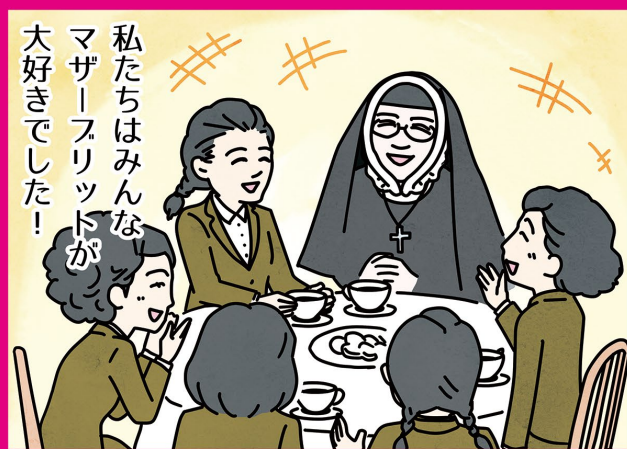
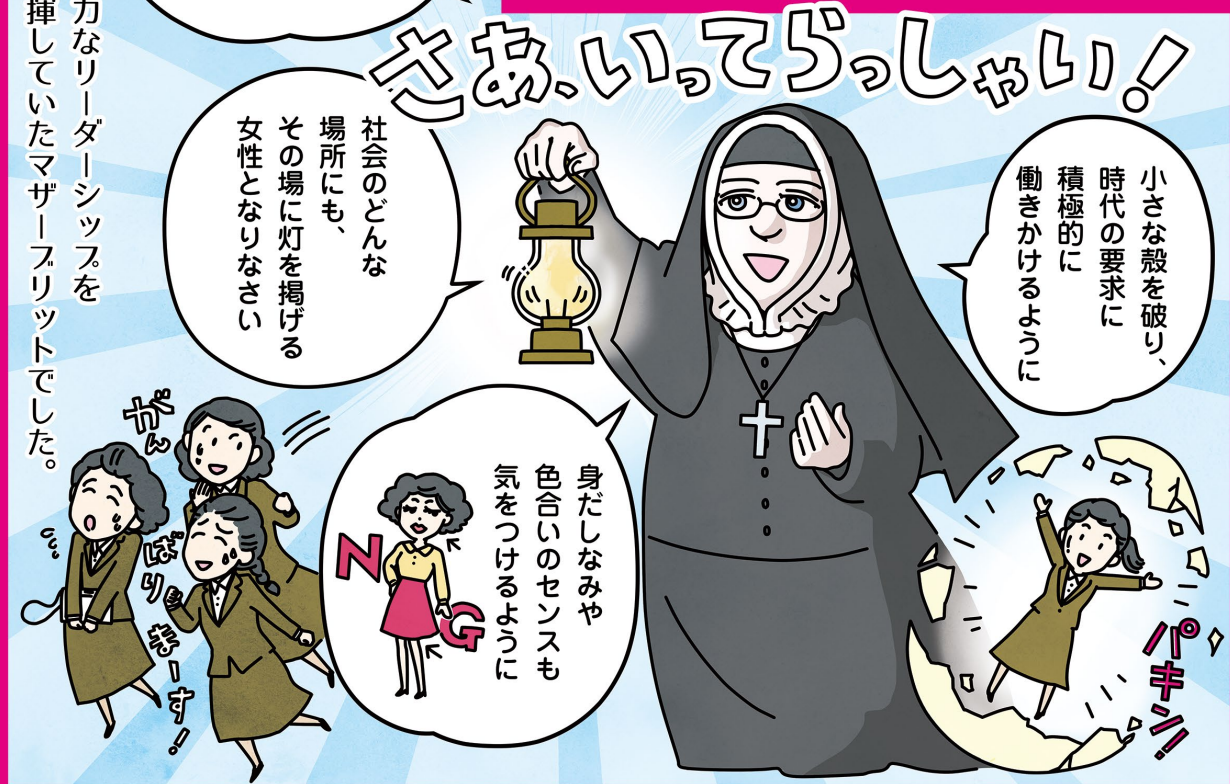
JICA職員との意見交換

# Be Independent

マザーブリットは聖心女子大学創立から19年間、学長を務め、その教えは多くの卒業生が生涯忘れられない言葉や場面として記憶されています。その一部をマンガとしてご紹介いたします。

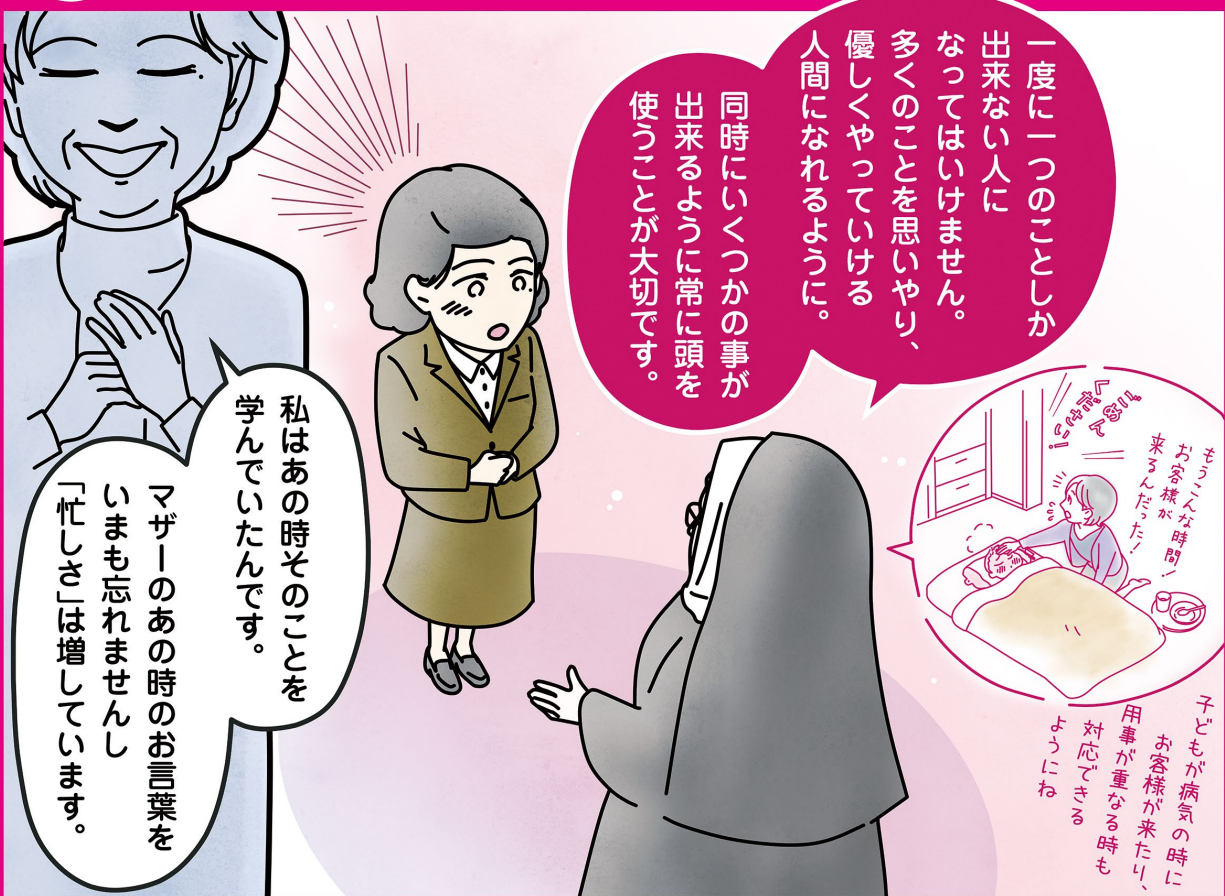
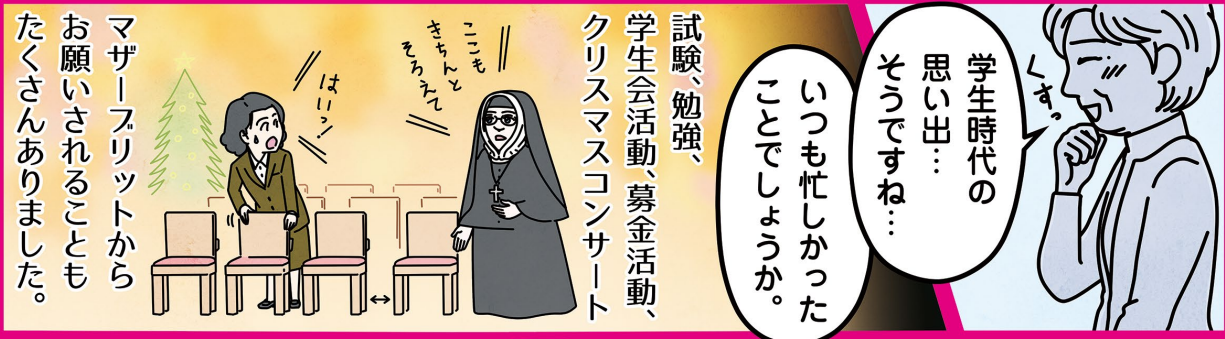


強力なリーダーシップを發揮していたマザーブリットでした。



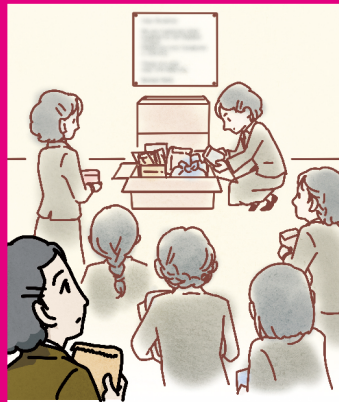
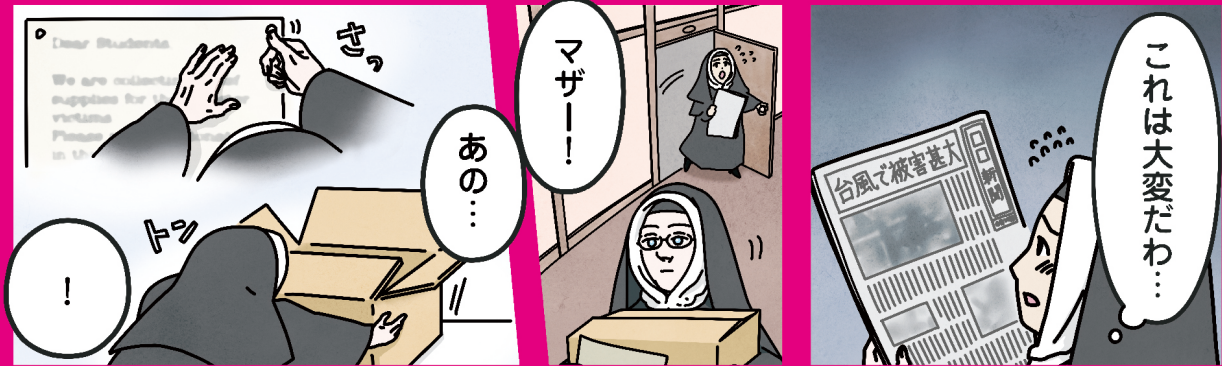
# Be Intelligent

マザーブリットは聖心女子大学創立から19年間、学長を務め、その教えは多くの卒業生が生涯忘れられない言葉や場面として記憶されています。その一部をマンガとしてご紹介いたします。

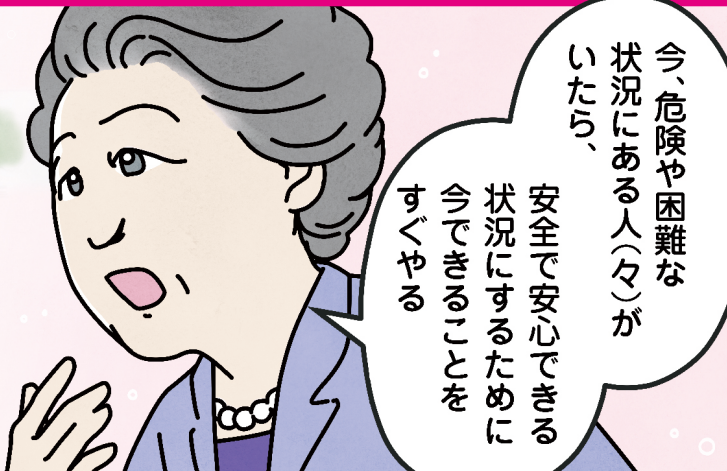
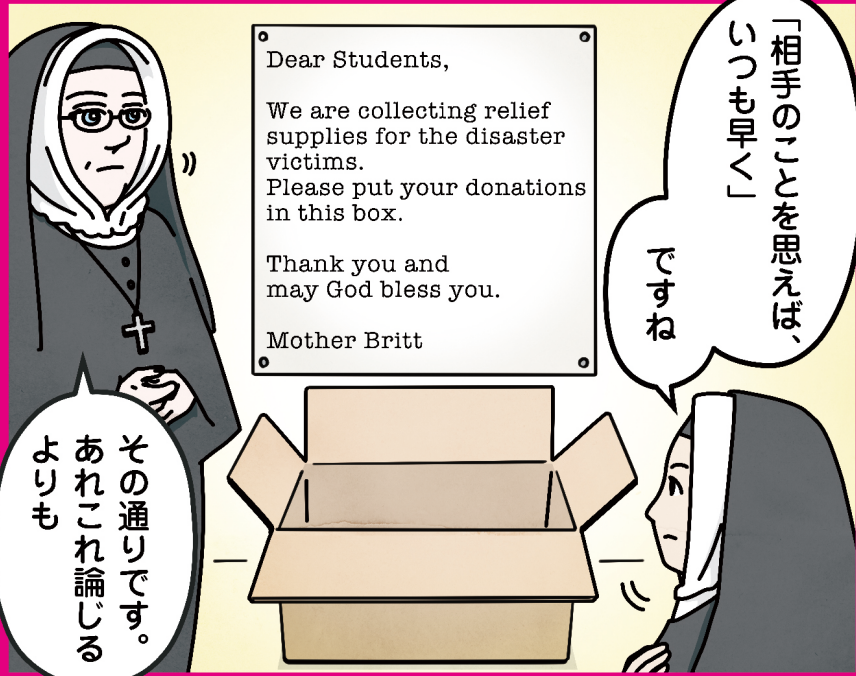


# Be Cooperative

マザーブリットは聖心女子大学創立から19年間、学長を務め、その教えは多くの卒業生が生涯忘れられない言葉や場面として記憶されています。その一部をマンガとしてご紹介いたします。



学生たちによる多くの物資が集まりました。そこには学生時代の緒方さんの姿もありました。



## キャサリン・エリザベス・T・ブリット／The Profile of Catherine Elizabeth T. Britt

1897年10月15日～1967年10月6日

※年齢はその年の満年齢（誕生日を迎えた年齢）をあらわしています

|             |                |            |   |
|-------------|----------------|------------|---|
| 1897年       | 10月15日         | 0歳         | Albany (ニューヨーク州) で誕生する。父 John, 母 Elizabeth Ryan   |
|             | 10月31日         |            | 洗礼を受ける。洗礼名 Elizabeth Theresia   |
| 1903年～1914年 |                | 6<br>～16歳  | 小学校は教会の教区学校 St. Patrick's Elementary School に通う<br>小学生の時に母が亡くなる。母の逝去後、母の従姉が来て家庭の世話をする<br>中学・高校は Academy of the Holy Names, Albany (A.H.N.) に通う。全教科優秀<br>だったが特に数学が得意<br>様々な活動に熱心に参加し、学校生活を楽しむ<br>弟の看病のため、勉強を一時中断。弟は数か月後に逝去 |
| 1915年       | 6月15日          | 17歳        | A.H.N. 高校を成績最優秀生で卒業する<br>師範学校（後のニューヨーク州立大学）で学ぶ  |
| 1917年       | 2月2日<br>6月1日   | 19歳        | Kenwood (ニューヨーク州) の聖心会修練院に入会する<br>着衣式   |
| 1919年       | 6月6日<br>8月     | 21歳        | 初誓願を宣立<br>Overbrook (ペンシルベニア州) の聖心女子学院で学監を務める   |
| 1921年       |                | 24歳        | Providence (ロード・アイランド州) の聖心女子学院で学監を務める  |
| 1924年       |                | 26歳        | Eden Hall (ペンシルベニア州) の聖心女子学院に勤務する   |
| 1925年       | 7月31日<br>10月   | 27歳<br>28歳 | ローマで終生誓願宣立（聖心会創立者マグダレナ・ソフィア・バラの列聖式と同時期）<br>Roehampton (ロンドン) で学び、その後 Tunbridge Wells (ロンドン郊外) の<br>聖心女子学院に勤務し、研修も行う   |
| 1926年       | 9月             |            | アメリカに帰国、Kenwood の聖心女子学院で3年間教える  |
| 1929年       | 1月             | 31歳        | Noroton (コネチカット州) の聖心女子学院で学監を務める  |
| 1931年       | 8月             | 33歳        | Overbrook の聖心女子学院で学監を務める  |
| 1935年       | 6月<br>8月       | 37歳        | フォーダム大学大学院より、文学修士号（史学）を取得する<br>Rochester (ニューヨーク州) の聖心女子学院の校長を務める   |
| 1937年       | 5月             | 39歳        | 日本に派遣される<br>聖心女子学院語学校（後の International School of the Sacred Heart）の副校長に<br>就任する   |
| 1942年       | 9月16日          | 44歳        | 第二次世界大戦中、26人の修道女達と共に抑留される（董女学院、現在の田園調布雙葉<br>学園）   |
| 1943年       | 9月14日<br>12月1日 | 45歳<br>46歳 | 交換船で、マザーノーランと共に、一時余儀なくアメリカに帰国<br>New York に到着   |
| 1944年       | 1月             |            | Manhattanville College of the Sacred Heart (ニューヨーク州) で教え、<br>3年次生を担当する  |
| 1945年       | 9月             | 47歳        | Rochester の聖心女子学院で副院長を務める   |
| 1946年       | 10月15日         | 49歳        | 戦後最初の船で、再来日する<br>聖心女子学院語学校の副校長に就任する   |
| 1947年       | 1月1日<br>3月     |            | <i>Where Is Truth? A Statement of Catholic Teaching</i> を New York で出版する<br>（聖心女子大学の宗教の教科書とされる）<br>聖心女子学院専門学校（聖心女子大学の前身）で教えながら、新制大学設立の準備に携わる  |
| 1948年       | 4月1日           | 50歳        | 聖心女子大学 初代学長に就任する  |
| 1952年       | 6月11日          | 54歳        | デトロイト大学より名誉文学博士号を授与される<br>アメリカ・カトリック大学より名誉教育学博士号を授与される  |
| 1962年       | 2月8日           | 64歳        | 長年の女子教育功勞により勲四等瑞宝章を叙勲される  |
| 1967年       | 3月31日<br>10月6日 | 69歳        | 学長を退任、名誉学長に任命される<br>69歳で帰天  |



マザーブリットによる4年生必修の授業  
"Current Ideas" (1962年)



1960年に創立した台湾の  
聖心女子学院を訪問した時



勲四等瑞宝章を叙勲される (1962年2月13日)



## マザーブリットの軌跡

*Tracing the Memories of Mother Britt*

来場者の皆様から「マザーブリットの写真をもっと見たい」というご要望を数多くいただきましたので、再度資料をよく調べたところ、新たな写真が見つかりました。

そこでこのたびの『緒方貞子さんと聖心の教育』第2期開催にあたり「マザーブリットの軌跡」と題して、マザーブリットの素顔に迫る貴重な写真をご紹介します。



"Ubi Caritas, Ibi Deus" will take on new meaning  
as you go forth to meet the daily challenges life offers  
you. Our shared, suffering, anxious world needs your  
open-armed charity, your tireless service, and your  
firm conviction that all things are possible when  
Love is the meaning.  
E. I. Britt  
2017

卒業生に送られたカード

"愛あるところに神がおられる"を大学のモットーに選ばれた



バザーで "Oh! Wonderful!" と言いながら、教室いっぱいに  
並べられた子供たちへの手作り贈り物を見る (1963年)



学生時代にはスポーツや  
ダンスが得意だった。  
ラケットを手にテニス部員と  
(1960年)



寄宿生のクリスマスパーティー。皆で編んだ  
ひざ掛けがプレゼントされる (1961年12月19日)

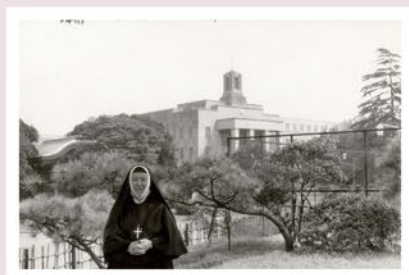




訪問された婦人と



エドワード・ケネディ夫妻来学（1965年）



マリアンホールをバックに



マザーブリットが使っていた学長室のデスク。  
今は教員の研究室で使用されている



微笑んで



名誉学長マザーブリットの大学葬ミサ。  
聖心女子大学聖堂にて（1967年10月9日）



不二聖心女子学院にある聖心会の墓地

すごい愛情でしたよ。

マザーブリットののもとで、  
しよぼしよぼする人間には誰もならなかった。

(小山靖史「緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で」NHK出版、2014年)

## 私が聖心女子大学から得た教訓は、 マザー・ブリット によるところが大きい。

マザーは自分でものを考え、人々のために行動する女性の育成を志されたのである。在学中のリーダーシップの養成は卒業後の社会貢献につながる、と考えられたのであろう。同時に、他人に対する丁寧な言葉使いややさしい物腰を重視された。

会報『宮代』第54号 2008年マザー・ブリットの思い出”

新しい女子大学を作る意味を、一生懸命に私たちに励ましを含めて話してくれたのです。すごい愛情でしたよ。私たちは大きな影響を受けましたね、あの方から。素晴らしい人だったな、本当に。稀有な人、というのでしょうか。

『緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で』(NHK出版)より

## 積極的に 時代の要求に

働きかけることを  
強く訴えておられる

『マザー・ブリット追悼録』1969年12月刊

マザーが  
卒業生へ寄せられた  
最後のメッセージには、  
いよいよ私達も小さなからを破り、

恵まれている人たちは常に他を  
思う感覚を持たなくてはいい  
ないと思うのです。  
自分たちも豊かになって欲しい  
のですが、自分だけが良くなる  
ことはありえないという考えを  
持って、どこかに包括的な感覚  
を取り入れて欲しいのです。

『転機の海外援助』(NHK出版)より

マザー・ブリットは、いつも私たちに、  
「You'll be married all your life!  
目の前にある大きな挑戦に取り組み頑張りなさい。」  
と、背中を押して下さいました。

『宮代』第60号 2013年「宮代」六十号発行を記念して

## 緒方さんの言葉を聴く

# 今、あなたの隣にいる人のために

できることをやる、という  
努力を積み重ねる

そして、世界の多様性を学び、経験することが大切です

みころ100年の歩み1917-2017 2018年4月1日

私は、善を持っているのが人間性だと思っています。この世の中には、あまりに多くの不正や悪がありすぎます。

『共に生きるということ be humane』(株式会社 PHP研究所)より

世界平和は、多様性の認識と相互依存の教育の上に成り立っています。そのため  
の教育をどう行っていったらいいのか、  
これは私の問題提起であり…皆さんに考  
えていただかなければならない…

第21回開発教育全国研究会  
(2003年8月2日 立大学)

「シンポジウム 平和を築く学び第一部 講演」より

人道援助は慈善ではない。  
あなたは私を必要としているし、  
私もあなたが必要ですという、

## 人と人との 共存意識

に発する  
ものです

“援助の哲学”日本経済新聞 2005年8月26日

慈善援助といっても、かわいそうだからしてあげるといふんじゃない。やっぱり尊敬すべき人間なんですから、その尊厳というものを全うするために、あらゆることをして守らなきゃいけないという考え方です。

『緒方貞子 難民支援の現場から』(株式会社集英社)より

## 連帯感のある世界を

どうやって  
つくったらいいか

広く教育を通して大切な価値を共有し、最も恵まれない人たちのために何かしようという連帯感と使命感を持ちつづけて頂くことが、一番大事なことではないかと思うのです。

『緒方貞子 難民支援の現場から』(株式会社集英社)より

一緒に住み、一緒に仕事をする  
(中略)…共生に至らないと、本当の和解なんかになりませんからね。ばらばらになっちゃいけないんですよ。

『緒方貞子 難民支援の現場から』(株式会社集英社)より

人間としての難民を  
世話していく過程で、  
何をすれば一番最終的に  
残るかと言えばやはり

## 教育

じゃないか、と  
痛感したわけです。

2001年4月18日聖心会創立200年記念講演会  
“難民保護の10年とこれから”  
『カトリック女子教育』(9)

私たちの

# MESSAGE

◆ 緒方さんの「現場主義」の考え方に強く共感します。

私もEarth in Mindでの活動を通して、環境問題の啓発だけではなく、学内のプラスチック削減や学食のフードロスゼロに向けて現場に赴き、よく動くことの大切さを学びました。これは聖心で受けた教育、緒方さんも影響を受けたマザーブリットの教えが、今もお脈々と受け継がれている証だと思います。



Earth in Mind  
田坂優希

◆ 性別に左右されず、活動し続けた緒方さんは自立した女性の象徴だと思いました。

私は女性だからという理由で屈することなく、自分の意見を発せられる女性になりたいです。そして、私たちの生きる未来が、緒方さんのような勇気を持った女性がたくさんいる世界であると良いと思いました。



Earth in Mind  
高森

**Earth in Mind**  
(持続可能性)



2020年は環境問題に取り組み、学内のウォーターサーバー設置やフードロス削減を実現させました。

◆ 聖心の教育は私を大きく変えてくれました！

入学前はとても引っ込み思案でした。しかし、マザーブリットの「世界をよく見なさい」というお言葉通り、ボランティアで様々な境遇の方々と交流し、日々の授業では実践的な学びを与えていただきました。

今では、子どもたちを導く教師になりたいという夢を持っています。



M.S.S.S.  
岩森千宙

◆ 「忙しくても、同時にいくつかの仕事をこなせるように」(マザーブリット)

現代は猛スピードで変化し、多くのことが同時進行に起きて、問題の背景には様々な要因が複雑に関係していると思います。どんなに忙しくとも、要領よくこなしていくことが大切であると、当時の生徒たちに話したマザーブリットのこの言葉は、現代でも大事だと感じるし、強く共感します。



M.S.S.S.  
狩谷侖里

**M.S.S.S.**  
(地域・社会貢献)



児童養護施設での活動、点字や手話の取得や実践など地域への貢献を目的に活動しています。

◆ 緒方さんが活躍されていた時代と比べると、今は「女性だから」という理由で、思うようにいかないことが減りました。よりその人の中身が尊重されるようになったと思います。だからこそ、マザーブリットの「世界をよく見なさい」という言葉を自分なりに解釈しながら、現代のグローバル社会で活躍できる人になりたいです。



SFT  
黒田香帆

◆ 入学当初、私は聖心女子大学を詳しく知りませんでした。ですが、優しく気軽に会話できる先生方や先輩、思いやりのある仲間との出会い、今は心地よい雰囲気の中、自身の成長を感じながら学校生活を送っています。

かけがえのない仲間と共に過ごし語り合うことで、自分の考え方が大きく変化し、感情が動くような様々な経験をしました。



SFT  
市原郁英

**S F T**  
(フェアトレード)



「買い物」という形で発展途上国への支援・協力を目指し、学内での商品販売や普及活動を行っています。

## ◆ 過去を知る

～緒方さんと聖心の教育～

本展示を見た感想を、各学生団体の代表の皆さんに、3つのテーマで語っていただきました。

## ◆ <sup>いま</sup> 現在を語る

～私と聖心～

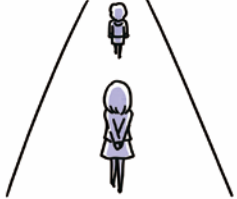
## ◆ 未来を描く

～ My Story ～

◆ 年表で初めて知る緒方さんの学生時代、改めて知る時代と共に歩まれた人生。

聖心スピリットが緒方さんの行動と言葉に根づいているということがわかりました。

世界規模で活躍され、聖心の先輩であると知りながらも少し遠い存在のように感じていた緒方さんですが、同じ教えを受けていたことに「繋がり」を感じ嬉しかったです。



SHOC project  
福井美夏汀

◆ 小学校からカトリック教育を受けてきた私にとって、キリスト教の教えは原点です。今でも心が苦しい時や迷った時は、大学の聖堂を訪れています。聖堂で思い出す言葉は、大学で学んだ「頭と手足、そして心をよく使うこと」。

一回の人生で経験できることは限られています。だからこそ、いただいた命を一杯使って生きていきたいなと思います。



SHOC project  
寺林優里

### SHOC project (オーガニックコットン)プロジェクト



学内外でのオーガニックコットンの栽培を通して東日本大震災の被災地福島県いわき市を支援しています。

◆ 聖心女子大学は少人数で主体的になれる環境です。向上心が高い学生が多く、やる気のある人の熱が伝わりやすいです。個性を大切に、周りを受け入れる風潮もあります。


だから私は難民支援を堂々として行うことができました。意思を主張することが苦手なので、聖心でなかったら胸を張ってボランティア活動を行うことはできませんでした。



SHRET  
辻 李佳

◆ 私は「ある国の難民」という大規模な視野を見据えて支援するのではなく、国内に視点に置き日本子どもたちが幸せになれる、そんな仕事に携わりたい。

口先で人々に語るのではなく、緒方さんのように先のことを考えながら、自分が人々に貢献できるよう有言実行し、多くの人たちが幸福である環境を作ることに努力をしていきたい。



SHRET  
辻 夏奈


### SHRET (難民支援)



入国管理局への面会事業、日本に暮らす方々への勉強のサポートなど、学生にできる支援活動を行っています。

◆ 激動の時代を生きた緒方さんだからこそ、国単位ではなく同じ人間であるという点を重視し、一人ひとりの命を平等に考え救う「誰もとりこぼさない」という姿勢を貫いたのだと思います。


そして、この姿勢は国連が2030年までに達成すべき目標としているSDGsの「誰一人取り残さない」を受け継がれていると感じました。



はなはなSDGs  
平塚伊央里

◆ Be independent, be cooperative, be intelligentの実践を通して、常に建設的な姿勢で多くの人々に勇気や愛を与え続けた緒方さんの生き方にとっても憧れます。後に続く私たちはそのバトンを受け取る必要があると感じました。

そのためにも、それぞれに使命がある中で、私に与えられた役割を通して周りにハッピーを届けたいと思います。



はなはなSDGs  
高尾みなみ

### はなはなSDGs (SDGsの普及)



MustではなくWantの精神で、“誰一人取り残さない社会”の実現に向け学び、普及と実践を目指しています。

# 緒方さんの活動を支えた 聖心同窓会のネットワーク

聖心は国内に6校、世界32ヶ国に姉妹校があります。

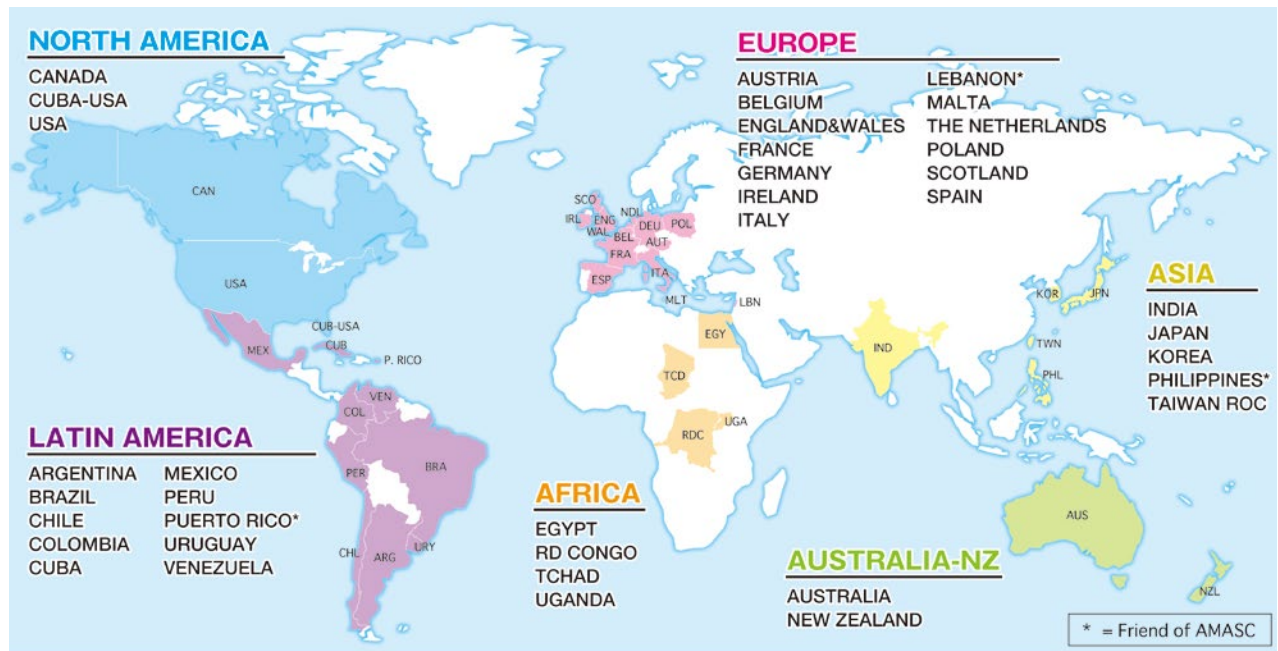
日本国内の聖心を卒業すると、その学校の同窓会に所属すると同時に、JASH、AMASCの会員にもなります。こうして世界に広がる聖心という家族の一員となります。

世界37カ国の聖心同窓会が所属する、  
世界でも唯一のグローバルな同窓会の統合組織

## AMASC 世界聖心同窓会

Association Mondiale des Anciennes et Anciens du Sacré-Coeur

- ・1966年、世界の同窓生の親睦を深め、人々の融和と平和の実現を目指すため、創設されました。
- ・4年に一度、世界の同窓生が集う大会が開催されます。国や世代を超えて同窓生が親しく交流する場であり、同時に開かれる各国会長会議では、AMASCの運営についての話し合いや次期会長の選出が行われます。AMASCの創設目的の実践を図る貴重な場です。



1972～1977年、緒方貞子さんは、日本人初のAMASC顧問をつとめ、後に名誉会員になられました。

## 日本国内8つの聖心同窓会の統合組織

# JASH 日本聖心同窓会

Japan Alumnae Association of the Sacred Heart

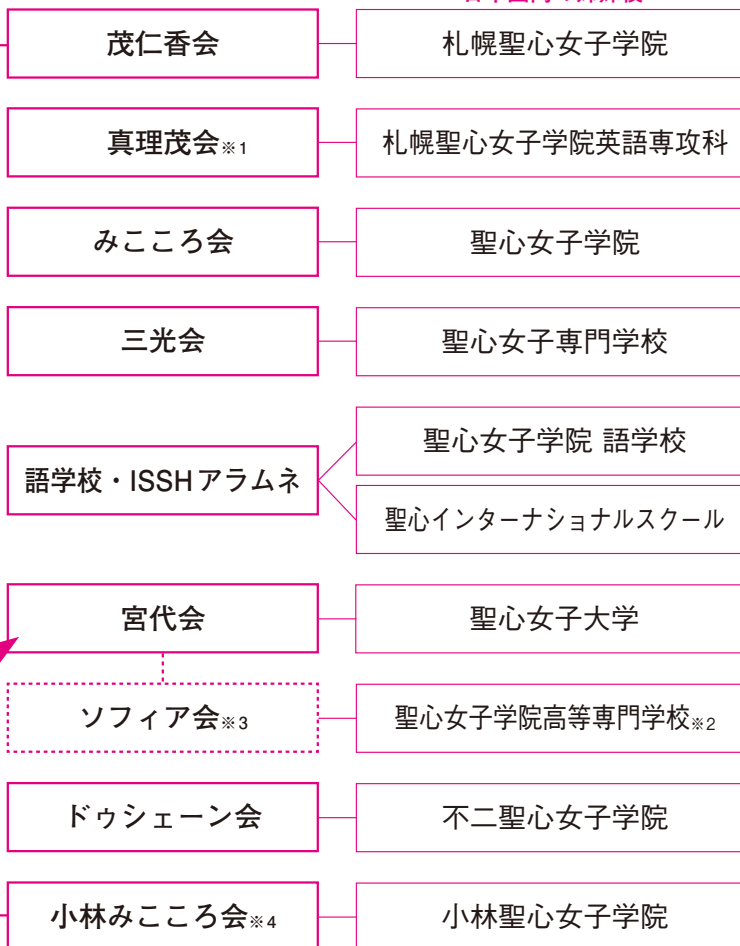
- ・1966年に創設。
- ・同窓会間の情報交換や交流を円滑にし、それぞれの活動を盛り立てます。
- ・AMASC（世界聖心同窓会）に対する日本の窓口。
- ・同窓生がボランティアで活動する3つの委員会（ホスピタリティ、JASH-AMASC、資料）があります。



2019年「JASHの日」  
聖心女子大学宮代ホール

8つの聖心同窓会

### 日本国内の姉妹校



札幌聖心女子学院



聖心女子学院



聖心インターナショナルスクール



聖心女子大学



不二聖心女子学院



小林聖心女子学院

緒方さんは  
初代宮代会会長を  
務められました

※1 2020年3月末を以って休会  
 ※2 聖心女子学院高等専門学校は聖心女子大学の前身でもあり、1950年3月大学の開校に伴い閉校した。  
 ※3 2009年11月10日宮代会理事会において、1995年の合併を確認。  
 ※4 2003年5月24日の小林みこころ会の総会を以って、小林みこころ会とバラ会\*は合併した。  
 \*バラ会：小林聖心女子学院専修科／小林聖心学院専攻科／聖心女子大学小林分校

## 謝辞 Thanks to

---

本展示にあたりましては、  
以下を含む多くの団体・個人の皆さまにご協力をいただきました。  
心からお礼を申し上げます。

### 資料協力

- ・独立行政法人国際協力機構 (JICA)
- ・国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)
- ・ICU アーカイブズ
- ・緒方家
- ・中村恵 (国連UNHCR 協会)
- ・聖心女子大学庭球部OG 会

### 制作協力

- ・MICHE Company LLC (展示ディレクション)
- ・イナコ (イラスト・グラフィックデザイン)
- ・森田デザインプロダクション (ブックレットデザイン)
- ・石田デザイン事務所 (DTP)
- ・ART LABO (会場デザイン・装飾)
- ・加藤治男 (空間制作)
- ・Mitsushi (メッセージ動画制作)
- ・らくだスタジオ (動画撮影・制作)
  
- ・日本聖心同窓会 (JASH)

**助成**：一般社団法人 東京倶楽部